ケープタウン探訪記

— 国際会議 IEEE ICC2010 参加顛末記 —

街plus 探訪

東京工業大学 山岡克式 Katunori Yamaoka

01 南アフリカに行ってきます(旅立ち)

それは、2010年5月頃のこと。

「今度、南アフリカのケープタウンに行くことになったんですよ。」

「えっ、サッカーのワールドカップを見に行かれるんですか？」

「違うんです、仕事で出張なんですよ。」

「(ややとまどいながら?) ええっ、でも、ついでにサッカーも見てこられてはいかがですか？」

「ワールドカップ開催の日程と、2週間ずれていますから、それは難しいですね。」

「(困ってしまって) んー、でも、ケープタウンといえば、喜望峰が有名ですよええ…。」

「犯罪さえなければ楽しめそうなんですけどね…」

会話のネタふりとして、この頃に幾度となく使われたこのフレーズ。最後の部分は、喜望峰の代わりに、南アフリカといえばワインが有名ですよええ、とか、大自然の野生の動物がいっぱいですねえ、とか、いろいろバリエーションがあり、なんとか楽しげな話に持って行こうとする。しかしこの当時、テレビで連日報道されていたのは、

「南アフリカで犯罪に遭う確率は150%(一度ではすまない).」

「車は交差点で赤信号でも止まらない、止まったら強盗に襲われる。」

「ワールドカップ中継に日本の放送局は女子アナウンサーを派遣せず。」

などなど、物騒な話題ばかり。ケープタウンは、南アフリカの首都ヨハネスブルグに比べるとまだ大分治安はましらしいとのことではあったが、そんなところに、サッカーが好きで自分の意志で自己責任でワールドカップを見に行くのならともかく、仕事でなければ、自分から積極的に行きたい場所とは、お世辞でも言えない。出張の日程が近づいてくるにつれて、南アフリカ出張への不安感は、日に日に増していった。そして、とうとう南アフリカに向けて明日は出発となったその前夜、たまたま飲み会で行った店で開催されていたのは、

～ワールドカップ開催記念 南アフリカワインフェア～

もう、この店でフェアのワインを飲んで、南アフリカに行ったことになって済ませてくれないだろうか、との思いもむなく、翌朝、こうしてお気楽にワールドカップで盛り上がる日本を後に、一路ケープタウンに旅立ったのであった。

02 南アフリカへの道のり

南アフリカは、南米ほどではないが、日本から見て、やはり地球の裏側近くに位置している。日本から南アフリカまでは、首都ヨハネスブルグまででも、直行便はない。実際、現地で会った日本からの出席者に行程を聞いてみても、香港経由、ロンドン経由、ドバイ経由、等々、様々な経路で皆さん現地入りしてきている。そんな中、私が選んだ経路は、シンガポール経由。メルカトル図法なら、日本とヨハネスブルグを一直線に結ぶほぼ経路上にシンガポールは位置しており、乗り継ぎも良く、実際現地までの所要時間は他の経路より短い。しかしそれでもシンガポールからケープタウンまでの直行便はないため、成田空港からシンガポール経由ヨハネスブルグ経由で、ケープタウンまで乗り継ぎ時間込みで最短22時間20分の行程である。私の場合は、往路は、この行程ではシンガポールでの乗り継ぎ時間が若干短かったので、用心して1便早い便で成田空港を出発したため、約30時間の行程となった。

機内で長い時間を過ごした後、夜明け。アフリカの大地が真っ赤に燃える太陽とともにお出迎えしてくれる。途中寄港地のヨハネスブルグでは、機内でそのまま待機し、飛行機はついにケープタウンへ(図1)。そしてようやく現地の午前10時過ぎ、ケープタウン国際空港に着陸。犯罪都市との前評判におびえながら、ついにケープタウンの地に降り立ったのであった。バゲージクレームで荷物を受け取る。荷物もきちんと日本から乗り継いできて、無事に到着。

空港の建物は、ワールドカップに合わせて改装したのかもしれないが、新しく大変きれいで、ごみが落ちていたり等の汚れた感じも全くない。一般に、治安の良さと清潔さには相関があることから、これならケープタウン、噂ほど危なくはなさそう、と一安心しながら、荷

図1 ケープタウンまであとわずか!

図2 ホテルの部屋からの光景

図3 誇らしげな横断幕

図4 バリケード

図5 ぞろぞろと歩く集団

図6 バブーンに注意!

物を持って空港ビルの建物を出ようとした瞬間、出口の扉のガラス(針金で補強されている)に、蹴ったのか、何か固いものでたたき付けたのか、大きくひびが入っているのに気が付いたのであった。

03 ケープタウンの街歩き

空港からホテルに向かうタクシーのドライバーさんから、「高級レストランだってクレジットカード使っちゃダメだよ、だって、いくらその店が高級だからって、従業員はその辺の人間だぜ、クレジットカードを不正利用しないという保障は、どこにもないよ」と脅されながら、ホテルに到着。ホテルは、現地滞在中、最悪の場合ホテルと会場の往復だけして後はホテルに缶詰になるつもりで、学会会場の国際会議場に隣接している(通路がつながっている)ホテルを予約しておいた。

ホテルの周りは、再開発地区なのか、近代的なビルが建ち並んでいるエリアであった(図2)。事前にテレビで見ていたようなスラムなどは周囲には見当たらず、高層ビルが建ち並び、ぱっと見た感じでは、落書きなども見当たらない。若干近くの公園でたむろしている人たちの目つきが悪かったことを除けば、日本にいるのと大して変わらない感じの、町の雰囲気であった。町に行く車も、新車のようきれいな車ばかり。学会の会場も、近代的で、大変きれい。ワールドカップの横断幕も掲げられており(図3)、数週間後に迫ったワールドカップ開催に向かって、町が盛り上がっているのがよく分かる。ただし、逆にまだワールドカップ開催まで数週間あるためか、予想以上に町が落ち着いていたともいえる。

そんなこんなで、学会の会場とホテルの往復だけで数日経ったある日、同じく学会に参加している知人から、夕食に誘われた。それなりの人数で、夜の町に繰り出すらしい。一人ではちょっと怖いのが、大勢いるなら大丈夫かなと、喜んで参加することにする。

夕方、ホテルのロビーに集合すると、どうやら、ウォーター・フロントというショッピングモールまで出掛けるらしい。このウォーター・フロントまでは、ホテルからシャトルバスも出ているが、人数も多いし、徒歩15～20分なので、往路は徒歩で行くとのことであった。ケープタウンに到着してからずっとホテルと会場にこもっていた私にとっては、千載一遇のチャンスである。

ウォーター・フロントまで、少々おびえながらも、みんなにはぐれないようについて行くと、車の通行は多いが思ったより人通りがなく、こちらは10人以上の大人数なので、かえって安心する。道すがら町を観察してみると、まず目に付いたのが、バリケード(図4)。何か事があると即座に道路が封鎖できるように、準備がなされている。今日は人通りが少なく、平和な感じであるが、もしかししたらこのバリケードが使われるような物騒な事態も、時には発生

するのかもしれない。また、確かに落書きは少なく、きれいな町並みなのだが、人氣が少なく、たまに向こうから人が歩いてきたりすると、思わず身構えてしまう。時間は夕方の7時頃なのだが、みんな車で移動なのか、この時間帯には店もほとんど閉まっており、また歩いている人もほとんどいないのに違和感を感じるの、平和な日本人的感覚なのだろうか。

ようやくウォーター・フロントに到着。ケープタウンの観光地であるウォーター・フロントは、外国人の旅行客も多いようで、そのエリアの入口にはガードマンも立ち、治安は良さそうである。きらきらとネオンが輝き、人氣にあふれるウォーター・フロントの敷地内に入って、ようやく一安心(図5)。ショッピングモールだけあって、いろいろなブランドショップもあるようだが、レストランエリアも、フランス、イタリア、タイ、中国、韓国、日本、などなど、様々な国の料理の店が並んでいる。そんな中、今晚のお店は、既に予約がされていた、南アフリカ料理のレストラン。この店の南アフリカ料理は、もともとここがオランダやイギリスなどヨーロッパの国々の植民地だった歴史を持ち、かつワインの産地ということもあり、ヨーロッパの料理に近い感じで、私はラム肉のローストを注文し、また隣の知人が注文したラム肉のシチューも少し味見させてもらったのだが、どちらも良い味で、実に南アフリカワインによく合う。値段は若干観光地価格なのだろうが、それでも日本から見たら割安に感じる値段で、大満足であった。

04 喜望峰へ

日本を出発するときには、現地ではホテルと学会会場からは一歩も外に出ないつもりでケープタウンまでやって来たのだが、単独ではなかったとはいえ、夜の町に出たことで少し自信がついた私は、せっかくここまで来たのだから、どうせなら喜望峰も訪れてみたいと思い始めていた。ちょうどそんなとき、同じく学会に参加している知人から、学会の予定の合間に、信頼のできるタクシードライバーがいるので、タクシーを1台貸切りにして、喜望峰を見に行かないかとの誘いを受けた。なんとありがたいお申し出に、渡りに船と、二つ返事で同行させて頂くこととした。

翌日の集合時間に集まったのは、合計4人。ドライバーさんを含めて、5名での喜望峰行きとなった。早速ドライバーさんから、本日の行程の予定の説明がある。単純に喜望峰の往復をするだけかと思っていたら、どうやら途中にもいろいろと見学に立ち寄るらしく、わくわくする。

ホテルからもよく見える、やはりケープタウンの名所であるテーブルマウンテン(ちなみに、この山の上までケーブルカーで登れるらしいが、私は結局行かずじまいだった)を見ながら、車は町中を抜けて、やがて海沿いに出た。ここで小休止。この辺りでは、時期

によってはクジラを見ることができるらしい。また、クジラの監視小屋が立っている。辺りの治安は良いらしく、散歩やジョギングをしている人がちらほら見られる。そんな中、ドライバーさんが、バブーン (Baboon) という生き物について、説明を始める。

バブーンは、このケープタウン周辺に住むサルのような生き物らしい。性格はかなり凶暴で、人間も襲う。ちょっと前にも、ここからすぐ近くで観光客の乗った車がバブーンに襲われ、現金とパスポートだけ奪って逃げて行ったらしく、などと、そのときの新聞記事を見せながら、本当の話か冗談なのかよく分からない話をする。ただ、バブーンという生き物が危険なのは事実であるらしく、「バブーンに注意」の看板が、この辺りの至るところに見受けられる(図6)。このときには、幸いバブーンに遭遇することはなかったが、実はこの後、喜望峰の灯台にて、我々もバブーンを目撃することとなる。

再び車は出発。続いて向かったのは、ボルダーズ海岸 (Boulders Beach)。ここにはペンギンコロニー (繁殖地) があり、野生のペンギンが住み着いて生活をしているらしい。

ペンギンコロニーは、想像していた以上に、野性味のあふれるところであった。まず、ペンギンコロニーと我々人間を隔てる囲いが、存在しない。そのため、ペンギンのコロニーのある岩場からペンギンが平気で海岸を上がって陸の方まで散歩に来て、人間の座るベンチの置いてある周囲までもとことと愛らしく歩き回るのである(図7)。人にも慣れているのか、あまりこちらを警戒する様子もなく、その辺をうろうろしてくれるため、こちらとしては野生のペンギンを観察し放題であり、動物園でしか見たことのなかったペンギンを間近に見ることのできる、貴重な体験であった。ちなみに、この海岸に立っている看板によると、どうやらこの海岸では、人間もペンギンと一緒に泳いでも構わないらしい。

この調子でいると幾ら時間があっても足りないので、どれだけ見ていても飽きないペンギンと別れを告げ、車はいよいよ喜望峰へ向かう。喜望峰の位置するケープ半島は、喜望峰の大手前辺りからかなり広い地域が国立公園の自然保護エリアとなっているようで、入口にはゲートが設けられていた。外国で時折経験するが、日本の国立公園とは異なり、ここのエリアに入るには入場料が必要で、このゲートで入場料を支払い、中に車を乗り入れる。しばらく走り、ケープポイント (Cape Point) の駐車場に到着した。

ケープポイントは、いわゆる喜望峰 (Cape of Good Hope) とは若干離れた場所にある、海にゅっと突き出した、とがった半島の先端部分のことで、ここには灯台がある。もともと Cape も Point もどちらも岬という意味があるのだが、Point には先端という意味もあるから、「岬の先端」という意味なのだろうか。いずれにしろ、ここはケープポイントという地名になっている。駐車場から岬の灯台までは、結構な上り坂の遊歩道を徒歩約1時間必要らしく、結構な数の人が歩いているのが見えるが、我々はあまり時間が無いこともあり、遊歩道に並行して敷設されているケーブルカーを利用することとした。ところが、ケーブルカーは「今日はメンテナンス中」らしくて運行されておらず、代わりにケーブルカーの料金でシャトルバスが用意されていた。

シャトルバスを降りると、もう灯台はすぐそこ。灯台のところまで上がっていくと、ここから眺める景色は、絶景の一言に尽きる。海の色は青く美しく、また地球が丸いのもよく分かる(図8)。今見下ろしているこの場所で大西洋とインド洋が交わっていると思うと、はるばる日本

から遠いアフリカは最南端の喜望峰にやって来て今ここに立っているという思いも加わって、感無量。厳密には、アフリカ最南端の場所は、ここ喜望峰ではなく、他に何とか岬というあまり知られていないところがあるらしいのだが、そんなことをここで言うのは野暮というものである。なお、ここからは、この先に向かう予定である、本当の喜望峰も、ちょうど斜め上から俯瞰することができる。

しばしの感慨にふけた後、シャトルバスで駐車場まで戻って、土産物屋を冷やかす。よくあるキーホルダや絵はがきに混じって、インド洋と大西洋のことなのか、二つの海の海水 (正確には Two Shores Sea Water, 二つの海岸の海水) と称する、恐らく単なる海水を詰めただけと想像される瓶が売られていたのは、御愛敬である(図9)。土産物屋を出て、駐車場に戻っていると、駐車場の外れを、茶色い何かが動いているのに気が付いた。バブーンだ! 距離は十分あるのでさすがに襲われる危険はないのだろうが、こんなに人間のたくさんいるところにまで、人間を恐れずに出現するということは、やはりドライバーの言うとおり、かなり凶暴な動物に違いない。急いでカメラを取り出すが、バブーンはなかなか動きも素早く、すぐに草むらに姿を隠してしまい、残念ながらシャッターチャンスには恵まれなかった。

ケープポイントの絶景とバブーンを目撃に興味が収まらない中、車は出発。今度は本当の喜望峰に向かう。高台に位置するケープポイントから、ほぼ海面に近いところまで車は降りていき、海岸沿いの道を進んでいく。その途中、野生のダチョウが海岸をうろついているのに遭遇し、車を止めて観察することに。鳥だから2羽というべきなのか、でも大きさからは2頭と数えたくなるこの野生のダチョウは、先ほどのペンギン同様やはり人間慣れしているらしく、我々が近くにいっても特に気にする様子もなく、その辺りをうろうろ散歩している(図10)。大西洋をバックにたたずむダチョウの姿は、なかなか美しく、背景の大西洋の美しさも相まって、時の経つのを忘れて見とれてしまう。

つい寄り道をしてしまったが、今度こそ本当の喜望峰だ。ダチョウのいたところから車で少し行けば、もう喜望峰。喜望峰は、小高い丘のようになっており、そこまで遊歩道が続いているようだが、先ほどケープポイントから既にこの丘は俯瞰してしまっただけ、丘の上まで行く気は起こらない。実際、他の観光客も、ほとんどが丘の上までは行かず、丘の手前に建てられている喜望峰 “CAPE OF GOOD HOPE” の看板前までで引き返しているようだ。先ほどのケープポイントに比べると、絶景とまでは言えないが、看板の “THE MOST SOUTH-WESTERN POINT OF THE AFRICAN CONTINENT” (アフリカ大陸の最南西端) の文字が、先ほどのケープポイントとはまた異なった、日本から1万 km 以上離れたアフリカ大陸の端まで来たのだ、という感慨をぐっと呼び起こしてくれる。

時間があつという間に過ぎ、名残惜しい喜望峰に別れを告げ、帰路に就く。帰路は、往路と異なる経路でケープタウンの市街まで戻るとのこと、まず途中、ダチョウの牧場に立ち寄り、続いて車は海沿いの道を走る。途中で、漁港に立ち寄った。ケープタウンは、海沿いの町であるため、漁業も盛んであり、実際地元には新鮮な魚を使った料理を出す店が多くあるようだ。ホテルの朝食にも、マグロのたたきのような料理が並んでいたし、また、寿司屋もよく見かける。ちょうど港では、漁船が魚を水揚げしており、新鮮な魚をその場でさばっていて、人だかりができていて、日本の漁師町で見かける光景と全く同

図7 好き勝手にたたずんでいるペンギンたち

図8 二つの海の交わる場所

図9 土産物屋に並ぶ二つの海の海水瓶詰

図10 野生のダチョウたち

じ光景だ。考えてみれば、日本で消費される魚のかかなりの部分が外国からの輸入に依存しているわけだから、漁師町の光景が日本特有の光景と考える方が間違いである。

どことなく日本が懐かしくなる光景を後に、再び車はケープタウン市街を目指して海岸線を進む。この辺りは高級リゾート地らしく、高級マンションが一带に並んでいる。辺りをジョギングや散歩している人も多く、日本でさんざん聞かされてきた治安の悪さは、嘘のようである。そんな中ふと、先ほどの魚にちなんで、ドライバーさんとの間でケープタウンの人はよく魚を食べるのですか、という話題になった。ドライバーさんの話によると、ケープタウンでは魚は新鮮だから一般的によく食べられるが、特に近年は寿司が大人気らしいとのことである。理由を尋ねると、元々南アフリカの料理は脂っこいが、寿司は油っぽくなくてヘルシーだからね、とのこと。ドライバーさんも含めて、ケープタウンの人は寿司が大好きで、よく食べるらしい。一般に労働が厳しい割に食料に乏しい途上国では、食事が脂っこくなる傾向にある。それに対し、ケープタウンでヘルシーな寿司が流行っているということは、多くの人々が寿司で空腹を満たすことができることを意味していると考えられる。これは、南アフリカが経済的に発展してきていることを物語っているのではないだろうか。そんなことを考えていると、ふいにドライバーさんから、「寿司にもいろいろあるよね。ジャパニーズスシ、コリアンスシ、チャイニーズスシ。これらは、どこがどう違うのか、よく分からないので教えてくれ」と尋ねられ、一同、目が点になってしまった。冗談かと思って聞き返したが、本気で尋ねているらしい。寿司は寿司で、ジャパニーズだとかチャイニーズだといった区別はない、と答えておいたが、どうやらケープタウンの寿司にはその3種類が存在するようだ。逆に、ケープタウンのその3種類の寿司はどう違うのかドライバーさんに聞き返したが、ドライバーさんにもその違いは分からないとのことであった。日本から1万km以上も離れると、やはり文化はゆがんで伝わってしまうらしい。逆に、日本で行われている南アフリカに関する報道も、だいぶ内容がゆがんで伝わっているようだ。やはり、現地で本物を見ないと、理解できないことは多い。このドライバーさんにも、是非一度日本で本当の寿司を味わってほしいものだ。

そうこうするうち、車はケープタウン市街に戻ってきた。ワールドカップ開催会場のスタジアムの脇をかすめ、ホテルに到着し、本日の喜望峰への小旅行は終了となった。出発前に予想していた以上の盛りだくさんの内容に、大満足の小旅行であった。

05 さらば南アフリカ

早いもので、現地滞在5泊はあっという間に過ぎ去り、もう日本に戻る日となってしまった。あれだけ南アフリカにやって来る

前にはおびえていたにもかかわらず、現地での予想以上の居心地の良さに、不思議なことに早く日本に帰りたいという感覚は既になくなっていった。しかし、ここにはあくまでも仕事で出張してきているのであって、遊びで来ているわけではない。予定どおりホテルをチェックアウトし、帰路に就くことにする。

ケープタウン空港を離陸し、日本までの長い道のりの間、この数日間のケープタウンでの出来事を、一つ一つ思い出していた。結局幸いなことに犯罪には遭わず、喜望峰をはじめとした美しい風景やおいしい食事など、いろいろと堪能した。しかし、何よりも収穫として印象に残ったのは、犯罪都市のイメージが払拭できたことかもしれない。日本で報道されている、貧困にあえいでいる南アフリカというイメージとは大分異なる現実が、ケープタウンにはあった。

インド洋と大西洋の交わる地、ケープタウン。次に訪れる機会があるなら、そのときには今よりもっと国が豊かになって、犯罪のない安全な国になってほしい。そんな他愛のないことをぼおっと考えながら、帰路の長い機内の時間を過ごした。そしてようやく成田空港に着陸。5泊8日の、ケープタウン出張の旅は終わった。

06 後日談

日本に無事に帰国してから数か月後、クレジットカード会社から請求が届いた。明細書を見ていると、南アフリカで滞在したホテルに関して、なんと請求が二重に行われているのが気が付いた。確かに、ホテルの予約した部屋を一度取り消して新たに予約を取り直したのだが、実際にホテルに滞在した部屋の請求だけでなく、キャンセルしておいた部屋の予約分についても、しっかり請求されていたのである。ホテルに連絡すると、あっさりホテル側のミスと分かり、無事返金してもらったが、やはり南アフリカは油断がならない…。

山岡克式 (正員: シニア)

平3 東工大・工・電気電子卒。平5 同大学大学院修士課程了。平6 同大学大学院博士後期課程退学。同年、同大学工学部助手、平12 文部省メディア教育開発センター助教授、平13 東工大助教授(職制変更により准教授)、現在に至る。平13~15 国立情報学研究所連携助教授。博士(工学)。マルチメディア情報通信ネットワークQoS制御、効率的コンテンツ流通制御、等に従事。旅をこよなく愛するが、近年出張ばかりで、自分の行きたいところを自由に旅することができないのが悩み。